

2019年2月24日礼拝説教要約  
シリーズ・ダビデの生涯に学ぶ⑫

## ダビデの子どもの死

(サムエル12・15b～23)

### 一、「主が打たれた」?

15節後半に「主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になる」とあります。とてもむずかしい聖句かと思われます。聖書が単なる古典であって、一つの資料として扱うなら何も気にすることは無いのですが、私たちにとっては神の言葉であり正典ですから、こういう聖句に出会うと、非常に悩んでしまうわけです。もし次のように書かれていたら、すんなり受け止めることができます。「ウリヤの妻がダビデに産んだ子は病気になる」と。ダビデはその出来事を、主が打たれたからだと思つた」と。こうすれば、ダビデは自分が犯した罪により神が打たれたと思つた、という意味になります。ですが、サムエル記が「主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になる」と断定するときに、当惑してしまうわけです。聖書は特別な書物であり、安易に「まちがっている」とは言いたくないからです。

### 二、背景からのアプローチ

やや聖書研究的な話になりますが、サムエル記の著者(編集者)は、ある価値観、ある歴史観によって、この書をま

とめました。その、ある価値観、ある歴史観とは、ヨシユア記から始まって士師記、次のルツ記は除いてサムエル記、列王記まで貫いているものです。そこに貫かれている歴史観を「申命記的歴史」と呼んでいます。律法に従うなら祝福が、逆らうなら呪いがもたらされるという歴史観です。これは、歴史観であると同時に価値観であるとも言えます。ちなみに、まったく異なる歴史観でまとめられた書があります。創世記です。創世記に書かれているヨセフの物語を思い出してください。聖書の解説によれば、主がヨセフと共におられたので、何があっても人生が切り開かれて行きます。ついにはエジプトの大臣となり、しかも一番高い位の大臣になります。ですがヨセフには、「自分を売った兄たちだけは赦せない」という苦々しい思いが残っていました。ところが、最後に兄たちを赦します。ヨセフは兄たちに言いました。「私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです」(創世記45・5、7)と。このように、どんなことがあっても、神の救いの御計画が進んで行くとみる歴史観であり価値観を「救済史」と呼んでいます。ですから、創世記のほうが、サムエル記よ

りも新約聖書のメッセージに近いと言えます。話はサムエル記に戻りますが、サムエル記は申命記的歴史ですから、ダビデが犯した罪を見逃すことなく厳しく糾弾しています。「主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になる」と。この記述は正しいのでしょうか。もし因果応報の価値観で読むなら、読み誤ることになります。すなわち「ダビデは罪を犯した。だから、生まれてきた子どもは病気になる」という価値観です。それがまちがいでであると語っているのが、ヨブ記です。ヨブ記に登場するエリフはイスラエルの預言者を代表しており、サムエル記と同じです。エリフは神の言葉を語り得たでしょうか。語り得ませんでした。エリフの後に主ご自身が語られ、ヨブが悔い改め(「方向転換」)に導かれているからです。罪を罪として厳しく受け止めるのはたいせつですが、それだけでは神の言葉にはなり得ません。神の言葉は、イエス・キリストにおいて完全に現れました。

### 三、ダビデに学ぶ

ダビデは自分が犯した罪をうやむやにしませんでした。同時に、現実には起きている問題に目を留め、最善を尽くしています。16節です。「ダビデはその子のために神に願い求め、断食をして、引きこもり、一晩中、地に伏していた。」

これは、悔い改めの表現です。子どもは七日目に死んでしまいます。そこで心配をしたのが家来たちでした。「子どもが生きているときに、王はあれだけ苦しめられた。子どもが死んだと王が知ったら、どうなるであろうか」と。ところが、王のほうで察知して、子どもが死んだことに気づきました。18節、19節です。「12・18～19」すると王は、家来たちが考えたのは正反對の行動を取りました。20節です。「12・20」ふつう、愛するわが子が病気になるたら、親が子が助かるように祈り求めます。子どもが快復したら親は喜びます。死んでしまったら、親は嘆きます。しかしダビデ王は異なりました。そこで、家来たちは王に尋ねます。21節です。「12・21」それに対するダビデの返答は次のようなものでした。22節、23節です。「12・22、23」何を考えていたのでしょうか。おそらく、こういうことです。「子どもが快復するか、死ぬかは、主が定められることである。だから、主の憐れみを請うて祈った。しかし主はこの子の命を取られた。ゆえに、主のなさった結果を受け止めて、主に礼拝をささげた」です。今一度、20節を見てまいります。「12・20」いかがでしょうか。ダビデの行ったことが理に適っていると見えてきませんか。ダビデはイエス・キリストと出会っていないものの、信仰とは何かを示しているように見えます。